

---

# Lupino?Cortile

竜零姫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Lupino? Cortile

### 【Nコード】

N8495T

### 【作者名】

竜零姫

### 【あらすじ】

幼い頃に両親を亡くし、双子の叔父に育てられることになったタツキ。

しかし彼が16歳になった時、叔父から自分が魔法使いだということを知られる。

## Episode 1 招待状（前書き）

登場人物紹介です。

現実とフロントマーティコでの彼らです。

語録集はほとんど美術関係の用語の説明です。

## Episode 1 招待状

<スノーチエル・フェオリーニ/原初のアダム>

身長 168cm

年齢 22歳 男

本編の主人公。

常に明るくお気楽な性格。

童顔で背が低く、実年齢より若く見られる。

予言では、彼が原初のアダムである。

<クラウド/イエス>

身長 190cm

年齢 17歳 男

大人びた風貌でクール。  
チャラついている外見とは裏腹に実はとても繊細で神経質な性格である。  
心やさしい青年である。  
予言では、彼がイエスである。

<ベイビードール／否愛のイブ>

身長 170cm

年齢 22歳 男

頭がよく顔立ちがいいが、少し捻くれ者で、感傷的でヒステリックなところがある。

使者（ウ、グル）の主でありファントマーティコあしの支配者でもある。恐ろしく残忍で慈悲の心など無いといった様子。

予言では、スノーの敵にして、最も愛するモノ、否愛のイブである。

<ランブレム>

身長 180cm

年齢 ??歳 男

ベイビードールの執事である。  
敵か味方が分からない人物。

<使者(ウグル)>

ベイビードールの奴隷しもへのこと。

あまり脳がないが、腕力の強さは計り知れない。  
人狩りを行い、人肉を食す。

<ジユダ/ユダ>  
身長 175cm  
年齢 25歳 男

ベイビードールに密かな憎悪を抱いている。  
予言では、彼がユダ。

<アンジエ>  
身長 175cm  
年齢 ??歳 女

女盗賊。

ジユダのことをよく知る人物である。

<トランペッティ>

身長 170cm

年齢 32歳 男

トランペッティのガラス屋の主人である。  
昔はベイビードールの側近だったらしい。  
予言では、彼がノアの箱舟である。

#00 始まりの物語とその幕開け（前書き）

この小説を読んでくれた方々に心から感謝を。

#00 始まりの物語とその幕開け

男の声はかすかにふるえていた。

「私に・・・死を選ばせますか」

っ

ルピナスの花畑が永遠に続いている？

？宝石の木の実を拾い集めながらその花畑を歩いていく

？ジューズの湖でのどの渴きをうるおして

？一本の瓶に白く輝く砂を集めて？

みんなみんな、トランクに入れて？

真珠の雨粒をかき集めて？

？海の底にあるシャンパンを味わって？

？ほら、フアントマーティコには幸せがいっぱいだよ

物語はまだ始まらない。

でも、確実に近づいている。

その時が今

退屈な 日々を 過ごす あなたへ、 この物語を 捧げよう。  
Le i s t a t r a s c o r r e n d o d e d e i g i o r n  
i n o s s i , a l l o r a l e d e d i c c o q u e  
s t a s t o r i a .

#01 Unbunvecchio hometown

「そっだ・・・」

する。

視える眼の殻を閉じ想像

「滑らかに・・・」

心の眼で静かに理解する。

「筆を走らせるんだ・・・」

そして

っ

「・・・おいつ・・・おいつ!!聞いてるのか!?!」

その野太い声でたつきはハッと我に返った。

「あっ・・・すみません。ちゃんと掃除します」

たつきはおどおどした声でそう言うと、足元に置いてあった清掃道具を片手にその場を去ろうとした。

すると、野太い声の主の大柄な男はそそくさと去ろうとするたつき

の首根っこを掴み、畳み掛けるような口調で言った。

「お前はただの清掃員だ。画家じゃない。」

大柄な男はたつきにそれだけを言うと、偉そうな態度でその場から去っていった。

その場にポツンと一人残されたたつきはしかめっ面をして大柄な男が去っていくのを見ていた。

「まったくやりきれないね」

そう言ってたつきはモップで床をゴシゴシと拭き始めた。

こちらで少し、この男のことについて話すでしょう。

たつきは画家だった。・・・じゃない。今も画家だ。

画力の才能はあったが、残念なことに画家としての才能はなかった。

故に、いつまで経っても売れない画家だった。

到底、画だけで食っていけそうになかったから、どこかいいアルバイト先はないかと探した。住み込みで働ける所を。

そこで見つけたのはこの古い図書館だった。清掃員として。図書館の屋根裏部屋に住まわせてもらえることになった。

それでも絵を描くのがたつきにとって本職だった。掃除をしている時でも、片手に絵筆を持っているのを想像してほづきを振り回し館

長に怒られる毎日を過ごしていた。

こんな所にいつまでも居られない。たつきには窮屈過ぎる。でも、ここを出て行った所で何になるんだろう。たつきにはここ以外居場所なんてない。

「ある晴れた昼下がリルピナスの花畑へ続く道」

たつきは陽気に歌いながら机の上を拭いていた。

「お船がゆらゆら海の上に浮かんでる？」

そして、今日も館長の怒号が飛び交っていた。

「歌を歌うなっ！！」

やっと一日が終わった。長い長

い一日が。

たつきは埃だらけの屋根裏部屋で一人、キャンバスに向かい絵を描いていた。

灯りは小さな窓から射し込む月の光だけ。

それでもたつきにはちゃんと視えていた。心の眼で静かに理解する。

「フロントマーティン・・・」

それが自分の望む世界ならばきつと見える。

## #02 ただの画家

たつきは生まれた時から孤独だった。人と信頼関係を結ぶことを知らず、愛を育むことを知らずに育った、完全に世の中から外れた男だった。

世の中がたつきを拒絶しているわけではない。たつきが世の中を拒絶しているのだ。

それ故、夜は図書館の薄汚い屋根裏部屋に一人閉じ籠り、ただ絵を描く毎日を過ごしていた。

『お前はただの清掃員だ。画家じゃない』

その言葉がたつきの頭の中でぐるぐると渦巻いていた。

「俺は・・・ただの画家だ。清掃員じゃない」

たつきは目を閉じ、深く息を吸った。

両手に抱えている大きなトランクの中にはひび割れたシーボルトとオルゴール、絵筆、キャンパス、三脚イーゼル、パステル。そして、わずかなお金が手元にあるだけだった。

もう振り返りはしない。十年間世話になった図書館を目に焼き付けて、早朝の誰もいない町中をただ一人歩いていった。

ガタツ・・・ガタツ・・・ゴトンッ・・・

たつきはそれからしばらくして眠ってしまったらしい。汽車が揺れた反動で目を覚ました。

目の前には老人が座っていた。老人は一枚のキャンバスを手を持っていた。

「あつ・・・」

たつきはそのキャンバスに見覚えがあった。

「きれいなルピナスの花畑ですね。この風景はどこのですか？」

老人はたつきにキャンバスに指を指して尋ねた。

「それは・・・俺の空想の世界」

そう言ってたつきは老人から徐おもむきにキャンバスを取り上げた。

「そうですか。空想の世界ですか」

老人はまるで無邪気な子供を見守るように微笑んだ。

「あなたは画家ですか？」

「ええ、まあ。そんなとこ」

「そうですか。いやあ、それにしてもすばらしい絵ですな」

「ありがとう」

たつきは愛想笑いをしてその場をやり過ごした。たぶん顔がひきつった笑い方だっただろうけど。

「俺はただの画家だ。清掃員じゃない」

### #03 血祭の予言

私に・・・死を選ばせるか

だが、・・・忘れるな・・・私は永遠だ

予言する。お前はいつか・・・この世界の者ではない者によって首を打ち取られるだろう

お前は・・・神に・・・見捨てられている

それなのに・・・永遠を手に入れようとは・・・

愚かしい。・・・愚かだっ！！

その目に焼き付けろっ！！大勢の民の血をっ！！私の血をっ！！

そして私はお前の血をこの目に焼き付けようぞっ！！

っ

ルピナスの花畑が永遠に続いている？

？宝石の木の実を拾い集めながらその花畑を歩いていく

? ジューズの湖でのどの渴きをつるおして

? 一本の瓶に白く輝く砂を集めて?

みんなみんな、トランクに入れて?

真珠の雨粒をかき集めて?

? 海の底にあるシャンパンを味わって?

? ほら、フアントマーティコには幸せがいっぱいだよ

物語はまだ始まらない。

でも、確実に近づいている。

その時が今

## #04 終着駅

「起きて・・・起きてください、終点ですよ!!」

たつきはハッと目を覚ました。

「ぐっすりと眠ってらっしゃいましたよ」

そう言うと、老人はさようならと手を振って汽車を降りていった。

たつきも急いで荷物を取って汽車を降りた。

終着駅の瀬見駅。

たつきが最後に汽車から降りた乗客だったのか、ホームにはたつき以外誰もいなかった。

たつきはふうとため息をついて荷物をしっかりと持ち直し、改札口へ歩き始めた。

降りる駅を間違えたのだろうか。いや、確かに看板には瀬見駅と書いてあった。

たつきが改札口を抜けると、そこは別世界だった。

## #05 幻曲の世界

何の変哲もない駅を降りればそこはあらゆる幸福に包まれたファントマーティコだった。

戻ろうと後ろを振り返れば、もうそこに改札口などなく、ただ幻想的な世界があるだけだった。

白い砂浜、地平線にまで続くコバルトブルーの海。

夕暮れ時の雲の隙間から射す光が、黄金のカーテンを造りだしていた。

木や草は角度を変えると輝いて見えた。

木にはキラキラ光る木の実があった。ルビー サファイア オパール赤、青、白・・・。

たつきは感激のあまり言葉をなくし、そのままその場に座り込んだ。そして、よく見てみると、白い砂浜はダイヤモンドの砂浜だった。

たつきは無邪気にダイヤモンドの砂を掴めるだけ掴んでは、そこに寝っ転がったりした。

たつきは思わず喜びの笑みを浮かべた。

そして、徐おそくに立ち上がると、どこまでも続く白く輝く砂浜に行く当てなく、元来た道を振り返ることなく歩きだした。

だいぶ長い距離を歩いたような気がする。

白い砂浜は永遠に続くかと思えば突然終わり、ルピナスの花畑へと入っていった。

ずっと歩いていても疲れない身体は、からだ たつきにとってはこのゆえなく喜ばしいことだった。

しばらくすると、ルピナスの花畑の中に水の流れる音がした。

川だ。

ちょうどいい。のどが渴いたところだ。そう思い、たつきは川の流れる音を頼りにルピナスの花畑をかき分けて行った。

川岸に付き、たつきは水を手ですくった。

よく見ると、赤みがかった水だった。

川の上流に目をやる。ルピナスの花畑で見えていなかったが、そこには死体の山があった。

「死体で水が汚れてる」

水を飲むのは諦め、去ろうとした次の瞬間

後ろに何者かの気配がして、たつきはハッと振り返ったが遅かった。

何かで強く殴られ、そのまま意識が遠のき、たつきはその場に倒れ

てしまった。

たつきの背後には二人の男がいた。たつきが死体の山に注意を向けている間に近づき、後ろから後頭部を殴ったのだ。

「本当にこいつだろうな。原初のアダムって奴は」

「間違いない。」

ウェーブのかかった黒髪の男が険しい目つきでたつきを見ながらそう言った。

「このトランクの中には何が入ってるんだ？」

金髪の青年がたつきの持っていたトランクの中を弄り始めた。弄

「おい、ジユダ見ろよ。ひび割れた瓶の中に船がある」

「不思議なものだな。やはり俺の言ったとおり、こいつが原初のアダムだ」

「俺たちが大妖精のもとに導いてやらないとな・・・」

「クラウド、トランクはそこに置いていけ」

「そいつ運ぶの手伝おうか？」

「いいや、人間の一人ぐらい俺一人で運べる」

「でも、腕怪我してるだろ？無理すんなって」

「大丈夫だ。ありがとな、クラウド」

そう言って二人の男はぐったりとしているたつきを抱えながら輝く森の中に入っていった。

## #06 原初のアダム

たつきは目が覚めて、気付けば森の中で寝ていたという状態だった。たつきはゆっくりと起き上がった。体がだるく、もう何日も寝込んだ感じだった。

「・・・頭痛がする」

上を見れば、重なっている木々の葉が太陽に照らされ眩しいぐらいに輝いていた。

すると、どこからか美しい歌声が聞こえてきた。

ある晴れた昼下がリルピナスの花畑へ続く道

「この歌は・・・」

どこかで聞いたことがある歌だった。

しかし、頭がぼーっとしているたつきにはそれがなんの歌なのか思いつけなかった。

？お船がゆらゆら海に浮かんでる？

「・・・」

たつきは足元をよろつかせながら歌声のする方へ歩いていった。どうしてもこの美しい声の主を突き止めたかったのだ。

だんだん歌声は近くなり、声の主は深い茂みの向こうにいるようだった。

たつきは恐る恐る深い茂みをかきわけていった。

そして

っ

「きゃあっ！！」

「おっとごめんよ」

たつきはさつと茂みの中に身を隠した。突然の事過ぎて何が何だか分からなかったが、ただ声の主は真つ裸の大妖精だということは分かった。

「お姿を現しなさい。原初のアダムよ」

大妖精はお淑やかな美しい声で茂みの中の男にやさしく話しかけた。

「はあ。まいったな」

たつきはこのまま面倒なことに巻き込まれる前にどこかへ逃げようかと思った。

「さあ、私は憤怒を知りません。安心なさい」

「・・・」

たつきはそつと茂みの中から顔を出した。

大妖精がにこやかに微笑みながらこちらを見ているのを確認すると、たつきはようやく警戒を解いた。

「原初のアダムよ。己をスノーチエルと名乗りなさい」

たつきは一瞬、困惑した表情をみせた。

「あー・・・スノーチエル？」

「そうです。己の真の姿を忘れてはいけません」

「原初のアダムって？」

「心の眼で静かに理解しなさい」

大妖精はそう告げるとまるで砂のように大地に溶け込んで姿を消してしまった。

たつきはしばらくの間その場に突っ立ったままこれは夢なのかと思いを揺らした。

「いつ・・・」

頬はじんじんと痛んだ。たつきはこれは現実なんだと確信した。

「・・・おもしろいことになるな」

そう言ってたつきは早くこの森を抜けて平野に出ようと歩きだした。



## #08 赤の支配者

たつきは輝く森の中を彷徨い続け、二日は経っていた。

お腹は空いて意識が朦朧とし、足元は覚束なかった。

「はっ……はっ……」

たつきは大木が切られ倒れていくかのようにゆっくりと地面に手をついた。

「はっ……はっ……はっ……はっ……」

苦しそうな自分の吐息が森に響き渡り、まるで遠くの方から聞こえてくるようだった。

すると、自分の目の前に立ちはだかる男の人影が見えた。

「情けない。ほら、立て」

たつきは男の差し出す手を握ろうとしたが、そこまで手が届かず、そのまま意識を失ってしまった。

「はぁ……世話の焼ける奴だ」

男はそう言い、たつきを引きずりながらとぼとぼと歩き始めた。

たつきはハッと目を覚まし、ベッドから転げ落ちてしまった。

「っ……」

「目を覚ましたか、若造」

たつきはだるそうに顔を上げた。

「どうだ、気分は？」

男は布地もそうだが縫い目も手荒でとても人が着れないような服を着ていた。

「ああ……良くなった」

「そうか。そりゃよかった」

男は一杯のスープをたつきに差し出した。

「ほら、飲め。栄養をつけないと」

「……具はキャベツだけ？」

「嫌なら飲まなくていい。返せ」

「……いやだ」

そう言ってたつきはスープを一気に飲み干した。

男はたつきがスープを飲み干すのを満足げに見ていた。

「よし、もう大丈夫そうだ。さあ出てけ」

「えっ？」

「出てけと言ったんだ」

たつきは一瞬、困惑した表情を見せた。その一方で男の顔は真剣そのものだった。

「お前を知ってる。原初のアダムだろ」

「いや。人違いだ」

「人違いだろうが何だろうが、使者たちがお前を探している。見つかったら殺されるぞ」

「そうか。じゃあ・・・」

たつきは男がこっちに注意を向けていないか確認すると、机に置いてあった地図をこっそりと盗み取った。

「さよなら」

たつきはそそくさと出て行こうとした。すると、男が不意に呼び止める。

「おい、これを持っていけ」

そう言って男がたつきに差し出したのは短剣だった。

「サンキュ」

たつきはその短剣をパツと受け取り、地図を盗んだことがバレる前にさっさと出て行った。

## #09 ヴルガータの予言

? ファントマーティコを望む者、 求む者、 すべてを愛す？

? この予言に抗う力を我はすべての晩期に残したり？

? ゆえ、 その力は代々受け継がれし？

? ゆえ、 その力はモノを支配する？

? ゆえ、 その力は主に愛を与えん？

? 民が築くモノ、 すべて幻想なり？

? ファントマーティコが望む者、 それは我の先祖なり？

? ウサギに招かれし男、 原初のアダムと名乗る？

? キリスト、 ユダ、 原初のアダムを暗き闇へ墮とす？

? 原初のアダム、 否愛のイブに囚われし、 イエス、 ユダ、 これを黙  
認しす？

? 原初のアダム、 否愛のイブから解放されたし？

? 原初のアダム、 ノアの箱舟に乗る？

? 原初のアダム、 否愛のイブ、 共に殺し合え？

「原初のアダム、否愛のイブ、共に愛し合え？」

「原初のアダム、異世界の者なり、ゆえ、ルピナスが導く道に戻るべし？」

「これがヴレガータの予言だ」

「へえ。これが」

「意味がわからないだろうが、ここに書いてある「原初のアダム」はお前のことだ。スノー。」

「俺？じゃあ……この……否愛のイブは？」

「残酷な運命だが……お前は……この試練を乗り越える必要がある……」

ジユダにしては歯切れの悪い言い方に、スノーに不安が募った。

「で？」

「……ベイビードールのことだ。」

「……ベイビードールって……女？」

「話さなかったか？……男だ」

「……」

スノーは5秒間黙り込んだ後、無理やり作り笑いを見せた。

「人違いだ。帰る」

「とにかく・・・予言は絶対だ」

逃げようとするスノーにジユダが念を押した。

スノーはもう吹っ切れたごとく、いつも通り明るい振る舞い方だった。

「簡単に覆れるさ」

「覆そうとするな」

「俺は男と愛を育むなんて御免だ」

フロントマーティコはそれはそれは素晴らしい所かと思った。

でも、実際はその逆だった。

川は死体の山で汚れているし・・・。

おまけに自分が男と

スノーはただ絶望するしか他ならなかった。

初めて来たときは反対、もうこんな所に居たくないとの心の底から思った。



## #10 侵入

「ほら、見る。あれがベイビードールの居る城だ」

ジユダが指さした丘の上に荘厳な城が建っていた。

「ふーん。いい家だ」

「奴はあそこにこもりっぱなし。外に出ることはほとんどない」

「ひきこもり？」

「ああ。困ったことにな。あの城は一度も落とされたことがない。  
・  
・  
・まあ、ゾンビが衛兵なら当然だろうな」

「ゾンビの衛兵か・・・身の毛がよだつな」

「しっかりしろ。それじゃあベイビードールを拝めないぞ」

「拝みたくない」

「まあ、そう言っつな。予言だ」

「・・・」

予言のことになると、スノーはがっくりとつなだれる。

「この家の倉庫には城への、今は使われていない旧地下水路に繋がる穴がある。そこを渡り、城に忍び込め」

「地下水路？なんか不衛生じゃないか？」

「なんなら、使者の間を通り抜けるっていう手があるぞ」

「わかった。地下水路に行く」

倉庫の中はほこりだらけで、一番奥にその地下水路への穴があった。

長い間使われてないためか、クモの巣が張っていた。

「いいか。この地下水路を抜けたら、城の東門のところに出る。だ

が、奴の部屋に繋がるのは正門だ」

「東門からは行けないのか？」

「城は侵入者を惑わすために、迷宮になっている」

「まったく、苦労させる」

そう言うと、スノーはゆっくりとクモの巣が張っている穴へ入っていく。

その時、スノーをクラウドが呼びとめた。

「おい、スノー。これを持っていけ」

と、短剣を渡された。

「それにはカエルの毒が塗ってある。かすり傷だけで一発だ」

「ありがとさん、クラウド」

「気をつけてな」

スノーはクラウドにうん、と頷いて手を振った。

穴は深い。やっと道のような道に出た。腕や頭に付いたクモの巣を払った。

ここが地下水路か。そこは一直線の通路で、ただ底知れぬ闇のよう  
な暗さだった。

手に持っているマツチだけが灯りだった。あまり辺りがよく見えな  
い。

水滴の落ちる音と自分の足音しか聞こえない。

「ああ・・・早く外に出たい」

ずいぶん長い距離を歩いたような気がする。まだ出口が見えない。

なぜジユダ達は自分一人でこんな所に行かせたんだろう・・・こ  
れも試練なのか？

スノーはそんなことを思いながら、前へ前へ進むと、ようやく一筋  
の光が見えた。

「・・・出口だ」

さびのはえた小さな鉄格子は簡単に抜けた。周辺を警戒しながら、  
ようやく暗闇から抜けだした。

「あーあ、服が汚れたな」

まだ払い切れていなかったクモの巣や、地下水路にわずかにあった  
水の汚れが黒く服に染みついていた。

## #11 「コヨーテの酒場」

その頃、ジユダは城下町の一角にある「コヨーテの酒場」にいた。すっかり顔は赤くなり酔っている。

「あなた、飲みすぎじゃない？」

一人の女が話しかけてきた。カールしている長い黒髪に、黒のコート、羽根付き帽子、ニーハイブーツの厳つい格好だった。

「・・・アンジエか」

「あなたがこんな所に来るなんて珍しいじゃない」

「まあな」

「原初のアダムは？予想通りの子だったわ」

あの年寄りの婆はアンジエの変装だった。

あの時、アンジエはスノーが本当に原初のアダムが見極めていたのである。

「ああ」

「ふふっ。こつこついう風に二人きりで会話するのは久しぶりね。？ユダ？」

「……その名前で呼ぶな」

「あら。だって本当のことじゃない」

「俺は……」

「わかってるわ。仕方がなかった、のよね」

「……」

「そうね。あなたがベイビードールに生かされなかったらよかったのにね」

「……あの時死ぬのは俺の運命だった」

「でも、あなたにもいくつか選択肢があったはずよ」

「……まだ盗賊暮らしなのか？」

「それが私が生きるために選んだ道よ」

「ふん。なるほどな。卑こしい溝鼠うさねの考え方だ」

「あなたもそうでしょ」

「……」

ジユダが窓の方を見ると、外は雨が降り出していて、人々があわてて帰っていく様子が見えた。

ダメだ。深く考えるな

自分もあの女と同じ卑怯者で、溝鼠なんだ

自分の意志だ

これが生きるために選んだ道だったんだ

悪魔だ

悪魔が自分に囁いたんだ

## #12 それほど我が愛しいか？

普通、城には一人二人見張りがいるが、見渡せばこの男の他に誰もいなかった。

「いくら城が頑丈だからって見張りが手薄じゃあ、もともともないな」

スノーは恐ろしいほど城の中にすんなりと入れた。

そこは無音の空間。空気の音さえしない。

第一、人の気配がない。何の存在も感じない。

「・・・？」

ふと見ると、不自然に開いている扉があった。

まるでこっちにおいでよと言っているみたいだった。

「・・・」

くくくくくくくくっ・・・

どこからともなく嘲笑う声が聞こえてくる。

スノーは身震いした。

「・・・」

スノーは招かれるように中へ入った。

くくくっ……あははははっ！！

「……最悪だ」

真っ赤だった。どこもかしくも赤、赤、赤。

血だ。そしてスノーが今いる所は……

ゴミ捨て場だった。あちこちに死体が転がっている。

皆、皮膚は腐敗し、肉が削げ落ちている者もいた。

とにかく鼻を覆うような死臭だった。

「……っ」

転がる死体が進行を拒む。前に進めなかった。

「ベイビードール！！」

スノーは叫んだが、声は虚しくも部屋に響き渡るだけだった。

すると、嘲笑うような声が聞こえてきた。

「そんなに我が愛しいか。我に会いたいのか」

スノーは辺りを見回す。

「くくくくっ……我われはここにいるぞ」

「どこだ？」

「くくくくっ……お前に我われは届くまい。くくくっ」

っ

扉がガチャガチャ笑いだしたと思えば、突如起き上った2体の死体  
にがっしりと腕を掴まれ、スノーは引きずられながら暗闇の中に連  
れていかれた。

### # 13 甘美なる出会い

気付けばそこは薄暗い牢の中だった。

「うつ・・・」

スノーはゆっくりと起き上がり周囲を見渡した。

自分と同じように捕えられた人間が数人、鎖で繋がれ、手枷をされていた。

スノーは自分にも手枷がされていることに初めて気付いた。

一生懸命外そうと、手を捻らせたり、鉄格子に引っ掛けてたりしたがどれもダメだった。

そんなことをしているスノーに一人の男が忠告した。

「どんなことをしたって無駄さ。諦めるしかない。・・・俺たちは直に食べられるのだから」

「はい？」

スノーは自分の耳を疑った。「殺される」というのはこの状況で分からなくもないが、「食べられる」というのは一体どういうことなのか。

「俺たちは・・・餌だ。あいつらの・・・」

「・・・」

その時、扉の開く音がし、階段を下りる足音がした。

看守のようなやつが二、三人。牢を開けてスノーたちを乱暴に鎖でつなぎ、暗い通路を歩かせた。

「・・・うっ・・・うっ・・・」

中には手も足もがたがたと震えさ、下をうつつ向いている者もいた。

これからどこに向かうにせよ、皆の反応で大体どうなるかは目に見えていた。

スノーは手足さえ震えなかったものの、心臓は破裂してしまいそうなくらい早い鼓動をしていた。

そして、やっと光ある所に出たかと思うと、看守はここで待っているとスノーたちに命じた。

そして、スノーは看守と入れ替わりに男がやってきた。

スノーはゆっくりと入ってきたその男に目を向けた。

赤とフリフリのレースに身を包んだその男はにっこりとほほ笑んでいた。

品定めでもするかのようにその男はスノーたちを見ていた。

そして、一番身体を震わせていた男にやさしい口調で話しかけた。

「何をそんなに怯える？」

そう言うと、ベイビードールは男の頬を両手で挟みもう少しで鼻と鼻がくつつくまで距離を縮めた。

「怯えることはない。素直に愛を受け入れればいいのだ」

ベイビードールは男の肩に腕をまわし、顔を肩に乗せた。



## #14 美食の宴

こんなもの食えるわけがないだろう。

スノーは一瞬ためらった。

が、食べなければ自分がこの食卓に上がることになるだろう危険を感じた。

「・・・」

「大丈夫だ。一口食べれば、罪悪感など感じん」

ベイビードールは平然とした顔で言ったが、そう簡単なことではない。

スノーは震える手でナイフとフォークを持った。

そして、頬の部分にゆっくりとナイフを突き刺していく。綺麗に抉り出したところで、取り皿にのつけた。

それは普通の肉だった。

「人生初めての経験だよ。人肉を食べるなんて」

そうやって肉を口に運んだ。噛みごたえも味もなんの違和感もなかった。普通の肉だった。

「・・・おいしい」

おいしくないと言えば嘘になる。でも、おいしいとも思わなかった。

「お前はさつき、俺を兄と呼んだな。何故だ？」

「……俺の兄ちゃんに……そっくりだから」

スノーは人のほほ肉にかぶりついた。もうやけくそだった。

不思議と、スノーは自分を見つめるベイビードールの目が妖艶に見えた。

「そうか。ならばそいつは兄らしいことの一つもしたことがないの  
だろうな」

「ああ。そうとも言える」

「お前は誰の命でここに来た？」

「……強いて言えば、予言」

「予言？」

ベイビードールはさつきまでののにこやかな顔から冷酷な顔になった。

スノーは肉にかぶりついたまま、その顔をじっと見つめた。

## #15 否愛のイブ

ベイビードールは冷ややかな目つきでスノーを見ていた。

「・・・では、お前が原初のアダム」

スノーはこの様子を見て、ベイビードールがあの子を理解しているとわかった。

「ああ。俺たち・・・今からキスでもしてみる？」

スノーはからかった感じで冗談半分と言った。

ベイビードールはそれに対し、鼻で笑った。

「お前はよく理解できていないようだ。？原初のアダム、否愛のイブに囚われし、イエス、ユダ、これを黙認しす？の意味を」

「はい？」

「大丈夫だ。できるだけ丁寧に扱ってやる。ただし

ベイビードールは冷笑を浮かべた。

「俺を楽しませてくれる間だけだ。飽きて楽しくなくなったら

殺すから心配するな」

スノーは思わず息を呑み、ベイビードールと空中でカチリと目が合った。

ベイビードールにとっては新しい玩具を見つけた程度でしかなかったが、スノーにとっては地獄の始まりを意味していた。

## # 16 彼の悲しい笑顔は

かくしてスノーは予言通りになった。

ベイビードールに囚われ、この城で生きた労働者として働くことになった。

周りに居るのは皆、使者ばかりだ。

「よっ、元気か？」

スノーは何のためらいもなく使者に話しかけた。

使者はうめき声にもならない声を出し、スノーは少し後ろに退いた。

「ああ、元気みたいだ」

スノーは一方的に話を終わらせた。

すると、一人の男がスノーに近づいてきた。

「奴はちゃんと働けて言ったんや」

スノーが横に目をやると、いかにも不潔な男がニヤツと笑いながらスノーの方をじっと見ていた。

「どっしてわかる？」

「ここに長いこと居ると、そいつらの言葉がわかるようになる」

「そうか。何年居るんだ？」

「せやな・・・ざっと数えて・・・五年やな」

「なるほど」

「俺はコレステイノや。よろしうな」

「・・・スミスと呼んでくれ」

スノーはそっけない態度をした。そして、ほうきを手に取り、床を掃き始めた。

「スミス？ええ名前やな」

「ああ」

コレステイノはそっけない態度をとるスノーのそばから離れず、スノーの足元で雑巾で床を拭き始めた。

この状況に見るに見かねたスノーがとうとう黙っていた口を開いた。

「コレステイノくん、一言いいかな。床はこんなにも広く続いてるのに、なんで君はいちいち俺の足元で掃除する？」

「じゃあ、お前の本当の名前教えてえな」

「スミスだって言ってるだろ」

とんだわからず屋だな、とスノーは心のどこかで思った。

「嘘や。なあ、俺たち友達とちゃうんか」

コレステイーノの？友達？という発言にスノーは耳を疑った。

「友達？ただの知り合い程度だ」

すると、コレステイーノは陽気に歌い始めた。

「俺たち、とくも〜だち〜 イッツフレンド？イッツフレンド？  
イッ  
」

「もうわかったから、その歌止める」

スノーは呆れた口調で言った。

それに反してコレステイーノは陽気な口調で聞いてきた。

「じゃあ、お前の名前は？」

「・・・スノーチエ・・・スノーだ」

コレステイーノは跳ね上がってスノーを抱きしめた。

「HEY!!!スノー!!!俺たち大親友になれたやんな!!!」

「いや、全然」

スノーはコレステイーノを冷たく引き離れた。

「なあスノー。お前にええこと教えてやるわ」

「いや、遠慮するね」

「ええから来いって」

コレステイーノは嫌がるスノーの腕を強引に引っ張って行った。

スノーが連れて行かれた場所は馬小屋だった。

コレステイーノが自慢げに話す。

「ここに隠し通路があるんや」

「そうか。役に立つ情報ありがとう。じゃ、俺は帰ると」

「ちーとばかり待ってって」

帰ろうとするスノーにコレステイノが呼び止めた。

「損はせんから!」

そう言うと、コレステイノは頑なに動こうとしないスノーを隠し通路へと押して行った。

暗い隠し通路をろうそくの火一本で進んで行った。

「まだか?」とスノーがだるい口調で言った。

「もうすぐやで」

コレステイノは壁を伝いながら歩いている。手で壁を触りながら、暗い通路にどこか穴がないか探っているのだ。

「・・・ここや!」

コレステイノはスノーを手招きして呼んだ。

そこは屈まないと入れないような穴だったが、十分に人が入れる大きさだった。

穴を抜けると、そこはどこかの部屋の暖炉に繋がっているようだった。

「へえ。すごいな」

スノーは感嘆の声を上げた。

「せやろ？ここには酒も果物もある。・・・ほんで宝石もな」

部屋は金銀の装飾品ばかりではなく、色とりどりの宝石に埋め尽くされていた。

コレステイーノがスノーを手招きして呼んで、あるものを指さした。

「これを見ってみろ」

それは棚に丁寧に並んでいる・・・子供のだろうか？小さな骸骨たちだった。

どの骸骨も綺麗にされていて、大きな目の穴に美しい宝石が埋め込まれていた。

「すごいな」

スノーはその骸骨たちがなぜ骸骨になったのか、そんなことは考えず、ただ感心して眺めていた。

「ここが誰の部屋かわかるか？」

コレステイーノが並べてある一つの骸骨を取り出し、それをやさしく撫でながら言った。

「いいや」

「ここは俺の部屋や」

スノーは骸骨に触ろうとした手を引っ込めた。

そして、スノーはコレステイノーの方を向いた。

「何だつて？」

「その骸骨たちは・・・俺の趣味ちゆうやつや・・・」

コレステイノーは終始笑顔を作っていたが、それには悲しみの想いが視えた。

スノーはふと、机の方に目をやった。

そこには小さい骸骨が二、三個置いてあった。

スノーとコレステイーノは馬小屋の屋根の上で夕日が沈むんでいくのを見ていた。

「さてと、酒でも飲むか」

コレステイーノはさっきとは打って変わって陽気になり、酒の入った瓶を二本、一本をスノーに渡して「乾杯！」と言った。

スノーはコレステイーノの陽気な様子を見ても、さっきの悲しそうな笑顔が忘れなれなかった。

「スノー、その酒飲まへんのか？」

黙り込むスノーを心配してコレステイーノが話しかけた。

「・・・」

「そうか。疲れてんやな」

スノーは遠くの地平線をじっと見ていた。

だんだん黒洞々たる色に染まってきく空。

すると、地平線の向こうで一瞬だが蒼く光ったのが見えた。

「あれは？」

スノーはコレステイーノを訪ねた。

「ああ、あれか。蒼の閃光だ。一度も見ないで死ぬ奴もいれば、見たってほらを吹く奴もある。でも、ここ最近よく現れるようになったんや。蒼の閃光が……」

「蒼の閃光？」

「こつちの世界とあつちの世界を繋ぐ光やて誰かが言<sup>ゆ</sup>つとたけど」

「あつちの世界？」

「俺もそこはようわからへん……眠いなあ」

そう言い終わった時にはコレステイーノはもう爆睡していた。

あつちの世界……もしかしたら自分が元居た世界かもしれない。

そんなことを考えながらスノーもコレステイーノの横で深い眠りについた。



## #17 とても悲しい日

翌朝。

スノーはそつとしておいてあげるべきだと思ったが、やはり気になつてコレステイーノに聞いた。

「なあ、ちよつといいかな？」

スノーが陽気に鼻歌を歌っているコレステイーノに歩み寄る。

「昨日の事なんだが」

「昨日の事？」

コレステイーノは鼻歌を止め、スノーの方をじつと見た。

「あー・・・あれだよ。その・・・」

「骸骨か」

「うん。そう」

コレステイーノは一度ため息をついて、それから悲しそうな顔を浮かべ話し始めた。

「・・・あれは・・・俺の妹<sup>きみ</sup>弟<sup>あにい</sup>たちや」

「兄弟？」

あれは・・・五年前の事だ。

お前は知らんやろな。なんせお前がここに来る前の事やから。

反乱が起こったんや。

俺たち民衆はなベイビードールの非情な行いに長い間苦しんできたんや。

その怒りが積もりに積もったがゆえの反乱やった。

俺たち家族、親父もお袋もきょうだい妹弟たちも勇気を奮い起して戦った。

でも、俺たちは分かってなかったんや。

そんなことをして、創造主が許すはずがあらへんとな

俺たちは殺されて当然やったし……

そのまんまでいろつてことや。

俺たち家族は捕まりベイビードールのもとに差し出された。

「目の前の事を拒絶するのか。創造主に刃向かうのか」

ベイビードールは満面の笑みで俺の方を見て笑ってこう告げたんや。

「お前は永遠に我の足元を這い、明日の希望を見出すことなく生きるがいい」

俺は解放された。でも、家族は？

ベイビードールは一瞬冷笑を浮かべて

あの時の事は今でもトラウマだ。

ベイビードールは一瞬冷笑を浮かべた後、俺に「よく見るがいい」と言っ  
て家族の方に指を指したんや。

俺はその時我が目を疑ったわ。

妹の皮膚が段々と爛れていくんやから。

親父は皮膚はもちろん、肉が骨から削げ落ちていた。

お袋も、他五人のきょうだい妹弟も。

反乱は終わった。俺たち反乱軍はあっけなく負けたんや。

反乱を起こした民衆は皆、俺の家族と同じ姿になっとった。

皮膚が爛れている者。肉が削げ落ちて、骨が剥き出しになっている者……。

亡霊のようによたよたと歩いて、躓いて倒れてしまえばもう二度と起き上がることはなかった。

反乱の後はまさに地獄絵図やった。

俺はその後、ベイビードールの城で永遠に働く誓いを立てたんや。

創造主に償いをしなきゃならんかったから。

「そうして五年経ったわ。あと百年も働かなきゃあかん。気が遠くなるで」

「・・・」

スノーは思わず言葉をなくした。

「それで、俺は家族の骸骨を持ち出して、せめて納骨だけはしてやりたいなと思って」

「・・・そうか」

スノーにはその一言を言うだけで精一杯だった。お悔やみの言葉なんて言えるはずもなかった。

## #18 敬と愛

「ベイビードールのことは憎んどらへん。むしろ俺はあいつは偉大な策略家やと思う。」

と、ある日そんなことをコレステイーノはスノーに言った。

どうやらコレステイーノは自分の家族を殺した人間を尊敬しているようだった。

「おかしい……」

スノーは何の前触れもなく呟いた。

「どうしたん？」

「いや……何でもない」

このフロントマーティコにきて一週間しか経っていないが、スノーはこの人間は皆おかしいと思った。

「お前も十分おかしいで」

そんなスノーの考えを見抜いたのかコレステイーノがパンを口に啜えながら言った。

「……」

「元気出しや。これ食つか？」

と、コレステイノは自分の食いかけのパンをスノーに差し出した。

「いや。いらない」

「なんや。おいしいのになあ」

そう言うと、コレステイノは静かに去っていき、スノーは一人きりになった。

スノーにとって一人だけの時間というのは実に久しぶりだった。

いつもコレステイノが近寄ってきて、元カノの話とか、あそこはああでこうでとか、一方的に話しかけてくるからだった。

別に嫌ではないが、少しぐらいそっとしてきてくれないんじやないかと思っていた。

「はあ・・・」

思わず大きなため息がでてしまう。

一体いつになったらこの悪い夢は覚めるのか。

そう思っていた時だった

「何を物思いにふけている？」

スノーはハッと後ろを振り向く。

そこにはベイビードールがしかめっ面をして仁王立ちをしていた。

「ベビィ・・・気付かなかったよ」

「そのベビィ」と略した言い方は止める

ベイビードールはさらに眉間のしわを寄せた。

「そうかい。でもベビィって呼ばせてもらっ」

「ふんっ。勝手にしろ」

「で？何の用？」

「お前を我が晚餐に招こうと思ってな・・・」

「そりゃ光栄だな。こんな綺麗な方に食事に招かれるとは」

スノーはからかうような口調で言った。

「・・・」

ベイビードールは怒った表情を見せてその場を立ち去った。

「じっくり、なんであいつがあんなことを？あいつはとろいからな」  
スノーは時々大きな独り言を言う。それが彼の癖だ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8495t/>

---

Lupino?Cortile

2011年11月13日09時50分発行